[redacted]

# 西洋史特集号発刊によせて

樋口祥己

アジアの苦悩の歴史の中で、一九四五年大平洋戦争終了以来ほど、苦悩に満ちたページはない。

共産主義は中国を制覇し、東亜の勢力均衡は一変した。ソ連は今や主導的な太平洋の勢力となった。日本は西欧防衛体系の前哨拠点に変形せしめられ、文字通りアメリカの橋頭堡の一つと化された。

そして、対立する二つの世界の最初の大規模な衝突に、朝鮮が戦場を提供したのであつた。実に重大な激変であつた。これはある意味で、現在にもまだ続いていると言える。

この異常に激しい世界史の流れの中に日本をどう位置づけて見ていくか。あくまでも世界史の研究は、未来の日本の可能性を信じさせるものでなければならない。今日の世界において起りつゝある事態の理解に、光を投げるものでなければならない。現在の日本のありかたが、どのようにしてきめられ、きまつて来たか。否、それよりも現在おこりつゝあり、将来おこるだろう事態の理解に、その根本において役立つものでなければならないと思う。本当に世界史研究の意義は大きいのである。

その意味で今度の『ふびと』（世界史特集）の発刊は、我々歴研会員にとつてまことにうれしいかぎりである。

願わくば我々の手にとられる西洋史特集号が、これからもつゞけて発刊せられ、つねに世界の動きと、歴史のあゆみが正しく見とられる人生の展望台となり、歴史を生み出す母胎とならんことを、たゞそれだけを、切にいのりたい気持である。

（八　朝）